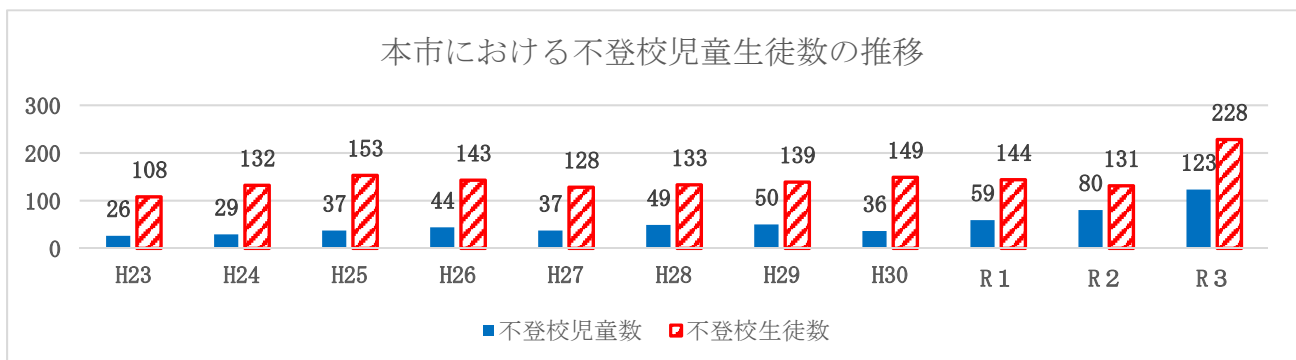


教育支援センターあすなる教室について（不登校対策事業）

■本市における課題

・不登校児童生徒数の増加

本市における不登校児童生徒数は、10年前に比べると中学生で2倍、小学生に至っては4倍以上と急激に増加しており、県や国も同様の傾向を示しており、今後ますます不登校児童生徒数が増加することが予想される。特に小学校での増加が著しく、不登校の低年齢化により、個や発達段階に応じた対応や支援が急務である。



■本市における不登校対策事業について

・学校での居場所づくり、相談体制の充実

様々な理由により教室への入りづらさや学校への行きづらさを感じている児童生徒が悩みを気軽に相談できるように各学校に心の教室相談員を配置したり、教育センター“すてっぷ”において公認心理士等が専門性を生かしてカウンセリングを行ったりしている。

・教育支援センター「あすなる教室」と「さくら」の設置

家や学校以外の居場所として教育支援センター「あすなる教室」と「さくら」を設置。「あすなる教室」では、異年齢の小集団での活動や曜日や時間ごとに活動内容が設定されている時間割の中で、自己決定や仲間を認め合う場をもち、自分の良さや可能性に気づき、社会的に自立することを目指している。また「さくら」では、家から一歩踏み出し、自分の好きなことや興味のあることから始める中で、自分の良さや可能性に気づき、社会的に自立することを目指している。

■教育支援センターあすなろ教室における課題について

・利用者の年齢層の幅の増加

様々な理由により教室への入りづらさや学校への行きづらさを感じている児童生徒の増加、とりわけ小学生の増加が著しい。現在「あすなろ教室」では、概ね1つの教室で小学校4学年から中学校3年生までが利用している。他にクールダウンをしたり、保護者の方と相談したりできる小さな部屋がある。一斉に行う活動に加えて、発達段階に応じた活動を行うためにも複数の部屋が必要である。利用する児童生徒が楽しみにしているスポーツや音楽等の活動の他に、自分で活動を決める活動では、中学生の中には、テスト期間中等、学習に専念したい生徒も多い。

令和4年10月に開室した「さくらまえみや」では、保育園の跡地を利用し複数ある部屋で、児童生徒が自分の好きな居場所を見つけて活動している。不登校児童生徒の保護者は、両施設に相談に訪れ見学して利用する施設を決めることが多い。学校復帰を目指す保護者からは「あすなろ教室」の生活リズムを整えるスケジュールや興味関心に応じた様々な活動、学習の時間の確保に興味を示す反面、活動場所の広さ等の理由から「さくらまえみや」を選択することもしばしばある。利用する児童生徒の発達段階やニーズに応じて活動の幅が広げられる環境等の整備により、まだどこにもつながっていない不登校児童生徒への支援を進める必要がある。

・活動場所の確保

現在月曜日はプリニーの総合体育館でスポーツ、水曜日は各務原特別支援学校にて音楽活動を行っている。特に、スポーツを楽しみにしている児童生徒は多い。跡地には体育館もあり、今後もあすなろ教室の活動を行うためにも、環境が整っている各務原特別支援学校跡地を有効に活用したい。

※参考資料1 教育支援センターあすなろ教室の1週間の流れ（リーフレット）

■特別支援学校跡地利用による効果について

・立地場所等の環境

市内全域から通室することを鑑みたとき、公共交通機関（ふれあいバス、電車等）を利用しても通室することができる立地の良さは魅力的である。

また、建物自体も木のぬくもりがあり、良い意味で学校らしくない（市内の小中学校と比較して）。学校への行きづらさを感じている児童生徒にとって抵抗感なく利用することができると考えられる。また、中庭や近くには公園もあり、外へ出やすい環境にある。これまではできなかったプランター等での植物や野菜の栽培も今後は活動として位置付けることも可能となる。